

フランスの小学校準備級 (CP) の 社会認識教育

金子 邦 秀

1. フランスの初等教育における準備級の位置と意義

本小論ではフランスの初等教育における準備級 (CP) の「目覚まし活動」について歴史及び地理の教科書⁽¹⁾、教師用指導書⁽²⁾をもとに考察したい。

フランスの社会科についてはすでにいくつかの考察⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾をしてきた。だが準備級については今回初めて取り上げた。我が国において低学年社会科が廃止され、生活科が実施されようとしているこの時に、再度低学年における社会認識教育の意味を考え直してみたいと思ったからである。

ところで、フランスの学校制度では、初等教育は5年制の小学校で行なわれる。その第1年次が準備級 (CP)、第2～3年次が初級 (CE 1・CE 2)、第4～5年次が中級 (CM 2・CM 3) とよばれている。そして、三区分別教授法によって、教科が三群に分けられ、国語と算数の基礎教科を午前中に、道徳、地理・歴史、自然観察、図工、音楽などから成る「目覚まし活動」を午後のはじめに、そして、体育をその後に教授することになった⁽⁸⁾。

社会認識の育成という点においてこの「目覚まし活動」の地理・歴史は、「新しい地理学」⁽⁹⁾・「新しい歴史学」⁽¹⁰⁾・「新しい心理学」⁽¹¹⁾に基礎を置きながら、子どもの社会認識を系統的に育成する優れた理論的枠組みを提供してくれる。今ここでその体系を詳述することはできないが、中級課程すな

わち小学校5年を終えた段階で子どもたちは地理的には諸外国まで、歴史的には2000年前までその社会認識を拡大するのである。それは、中級においては、地理の学習に遍歴法、歴史の学習に遡源法という教材編成原理を用いることによって可能になっている。そして、その前段階としての初級においては、衣食住を中心とするテーマについて、「ここ」(=今)、「かしこ」、「かつて」の3つのパートに分けて、現代フランスの都市・町・村すなわち子どもたちにとって身近な生活の営まれている環境をその出発点

表1 子どもの発達段階と可能な諸活動¹⁹⁾

段 階	心理(学)的な指標に応じた可能な諸活動
段階Ⅰ (3, 5歳) ● 位相的な空間 ● ある近所の意識の獲得, しかし, 空間的目標の整頓の欠如。	● (幼稚園の) クラスの部屋の中での, そして, リクリエーションの流れの中での測量柱を立てられた通行 ● 自分自身との関係による側面の観念の見習期間 (左/右, 前後, 上/下)。
段階Ⅱ (5, 7歳) ● 部分的な整頓 ● ユークリッドの空間の初歩的な直観 ● 一直線の列は十分に認識され表現されることができる ● 認識の優位に委ねられた, 直観と実際の知識の段階	● とりまく環境における通行, 観察を伴った家と学校の歩行。 ● 短い旅程表のデッサン (プランの生産の準備), あるいは移動通行のグラフィックな表現 ● 景観の展望, 模型。
段階ⅢA (7, 9歳) ● ユークリッド的なものとプロジェクト的なものとの集合体の整頓の可能性, それは子どもに単純な平面図を理解し <u>生産する</u> のを許してくれる。 ● 2次元的なグラフィックな表現の可能性 ● 直観から具体的な操作への移行	● 標型の実現 ● 平面図の作成 (学校, 街区, 場所, 等々)。 ● 風景のデッサン ● 環境の学習 (商業センター, 道路, 街区, 村落の学習からスタートしての, 構成の観察, 機能の説明)。 ● 地点 { 導入プランの上に位置づけられた。地方化された。

段階Ⅲ B (9, 10, 11歳)

- II Aに引用された可能性に加えて、距離と均合いの観念がより良く理解される。
- それゆえここではだんだんと縮尺の観念を構成する可能性があろう。
- 認知的なデッサンの可能性

- いつでも、デッサン } が生み出され、
 地図 } 読まれたりす
 平面図 } る。
- 写真的な見方の獲得、空中写真のレクチャーの見習期間。
 プランの生産による、1/2500, 1/5000の地図の講義の見習期間

段階Ⅲ/Ⅳ (11, 12, 13歳)

- 平面図、図式を作って読み、メートル法の座標を理解する可能性：
 ——抽象的な知的操作に対して
 ——地理学によって必要とされる科学的な精神と離れた空間の概念的な腕前に接近するのを許す仮説演繹的な思考に対して

- 地理を理解するための主要な縮尺の観念の見習期間
- 離れた風景の比較分析。これらの風景に横たわる地理的結合の説明。
- 他の地方のそれらと比較してのその地方の風景の分析。
- 単純で日常的な気象の観察、次いでグラフィックの講義による漸次的な、気候の観念

表2 準備級における教授過程の構文理論的モデル⁴⁾

学習の題材の分配	現在における投錨点	
	生徒たちの生活の環境	生活の環境あるいは近くの環境における拡大
生産の単位	×	×
分配の単位	×	×
社会的空間の整備の単位	×	×

N. B. 空間的、時間的教授の練習はこれらの学習テーマに統合されている。

として、「かしこ」において、諸外国との対比によって空間的に拡大され、「かつて」において、19世紀から20世紀の初めまでの環境に時間的に拡大される。

さらにその前段階にあたるのが、これから考察する準備級の「目覚まし

活動」地理・歴史である。具体的な考察の対象としたのはボルダス社の『いつか…どこかで』(1984年)である。この段階の子どもの発達は表1⁶⁸のように位置付けられている。また、準備級における教授過程の構成の理論的モデルとして、表2⁶⁹が示されている。

2. 準備級の全体構成

『いつか…どこかで』は、次の14章から構成されている。

- 1 夜明けからたそがれまで
- 2 徹夜をしている者たちとともに
- 3 1つの週から他の週へ
- 4 季節から季節に
- 5 休日に
- 6 小事件と大事件
- 7 道具と機械
- 8 どういたしまして
- 9 彼らの家における人間
- 10 彼らの仲間における人間
- 11 街路で
- 12 ルートで
- 13 道路によって、道路の外で
- 14 水上で、水にそって

まず、第1章から第6章では、時間の観念の獲得がはかられる。カレンダーへの導入がなされ、連続の意識、年代記的な順序、共時性などの観念の取得が目指される。第1章及び第2章では一日、第3章では一週間、第4章及び第5章では一年間の認識がはかられる。その上で、第6章では、

日常を例外から区別すること，その周辺に家族と都市の記録が構成される目印を認識することが目指される。

次に，第7章及び第8章では，道具と機械の利用を通しての人間活動の初歩的分類が試みられ，併せてサービスの観念へのアプローチがなされる。

第三に，第9章及び第10章では，社会的生活に対置される個人的生活と家族生活についての認識がはかられる。

第四に，第11章から第14章では，子どもが多かれ少なかれ経験をもっている移動を通しての空間の発見が目指される。第11章では街路に基づいた都市空間，第12章及び第13章ではルート及び道路に基づいた田舎の空間，第14章では水上の道についての認識がはかられる。

今，ここで以上のことを図で示せば図1のようになる。

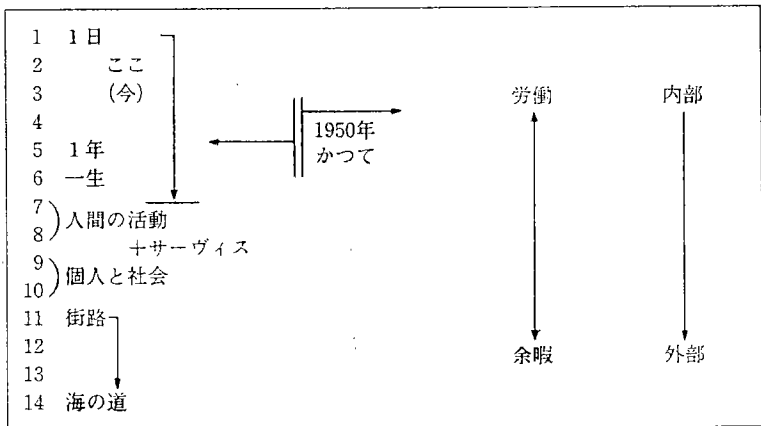


図1 『いつか…どこかで』の全体構造

3. 準備級の単元構成原理

3-1 目標の設定

『いつか…どこかで』においては、その目標は A 諸活動、B 時間、C 空間の 3 つのカテゴリーに分けられ、それぞれがまた関連のある語彙を伴っている。

A の諸活動に関する目標というのは、例えば、「2. 一日のリズム (例えば、以下では時間) の観察との狭義の結合において、専門的なカテゴリーの最初のアプローチが作動する。時間は人々の仕事に従って同じようなやり方で展開していくのではない。太陽の照明が外での仕事を条件づける；農夫たちや建築労働者たちは夜明けから黄昏まで働く；労働時間は季節に応じて多様である。電気の照明がこの枠組みをはずすのを許してくれる：雇用者と工場労働者は厳密な時間に従わせられている。」(第 1 章) といったものである。これが、「農夫—耕作者—労働者—雇用者—商人」といった語彙とともに指導される。このカテゴリーには、人間が社会で果たしている役割や機能が取り上げられ、それにかかわる社会科学的概念がその一般命題の中に組み込まれたり、語彙として明示されている。

B の時間に関する目標というのは、例えば、「3. 技術革新の初歩的観念を獲得する：我が国において道具、それは大部分かつての技術であった；機械、それは今日の技術である；自動化された機械、ロボット、それは明日の技術である。」(第 7 章) といったものである。これが、「古い—廃止された—新しい—現実の—近代の」あるいは「連続の—永久的な—プログラム化された」といった語彙とともに指導される。このカテゴリーには、時間や時代あるいはまた変化に関わる概念が明示されている。

C の空間に関する目標というのは、例えば、「3. 1 枚の平面図を入念

に作成する見通しのもとで、近所の街路の相対的位置を固定せよ。最終的にはこのイメージに、ユニークな感覚、回転の感覚を統合せよ…。それらの大きさに従って街路の類型化に帰着せよ：小路，街路，大通り，並木のある大通り…」(第11章)といったものである。これが、「街路—並木のある大通り—大通り—広場—(建物に囲まれた)広場—都心—街区—郊外」といった語彙とともに指導される。このカテゴリーには、空間や地理あるいは分布に関わる概念が明示されている。

もっとも、大事なことは、これらはただちに子どもたちにそのまま習得されると考えられているのではなくて、これらのカテゴリーは教師が使用するため、すなわち、教師が目標を分類したり、それらを、基礎的なものと副次的なものに区別するために、採用されていることである。

3-2 教科書

教科書は、各章ともに3つの部分から構成されている。第1が写真である。各章には6～9枚のカラー（一部古いものはモノクロ）の写真が採用されており、これらが、この準備級の子どもにとって、探究の出発点として位置づけられている。第2がテキストである。これは、写真と関連が深い内容であるが、決してその写真の直接の説明ではない。むしろ、このテキストでは、その写真との関わるさまざまな情報を提供し、そのことによって写真にある意味を与えることにその本来のねらいがある。以上の写真とテキストは後述する「発見」と「状況」に対応する。第3が統合のテキストである。これは、子どもたちを一般命題に導くことをねらいとしたテキストであり、各章に、数箇所挿入されている。これは後述する「拡張」に対応する。

2種類のテキストは何度も繰り返し読まれ、写真と結び付けられて子どもたちの認識の拡大に役立てられることが期待されている。

3-3 活動の基本型

子どもたちの探究を導いていく教授学習活動は、3つのアプローチを通して行なわれる。(1)「写真の発見」、(2)「状況」、(3)「拡張」である。

(1)の「写真の発見」においては、取り上げられた写真に1つの意味を与えるために、子どもたちの観察があつめられる。これらの観察は特に人間の諸活動に関わる目標へと導く。逆にいえば、写真をみる枠組みをここでは子どもに獲得させる。

(2)の「状況」においては、その写真が空間と時間の位置づけを与えられ、同時にその写真に引き寄せられてくる空間的、時間的なことが探られる。その写真を越えて、空間のこのちいさな部分を越えて、何がそこにあるのか？どんなもっと大きな全体にそれらは挿入されうるのか？どんな瞬間、どんな時期をこの文章はわれわれに提供しているのか？この枠組みの中でどんな修正がなされうるのか、なされたのか？こういったような発見をすることによって写真が子どもたちに課してくる制約を子どもたちが乗り越えることが期待されている。

(3)の「拡張」においては、最後に、子どもたちが会得したことを、彼らがすでに知っていることと結びつける傾向を意図的に活用した学習がはかれる。それらは、子どもたちの家族、その街、その村、その旅行、テレビのイメージであり、先行学習での経験によるイメージなのである。かくして、学習したことは思考そのものの中に取り入れられることになる。

3-4 補足的な研究

指導書はさらに「補足的な研究」の形でさまざまな教授学習活動が提唱されている。なかでも注目されるのが、図表の構成である。毎日の、毎週の、季節の仕事の、道具と機械の、開いている店と閉っている店の、家事仕事の、…と、実にたくさんの図表が作成される。それは、この段階の子

どもにとって耳で聴くだけでは理解がむずかしいことも、イメージやデザインの提示あるいは書くことを伴うことによって理解しやすくなるからである。また、子どもたちを夢中にさせるものでもあるからである。図表の中でも特に重視されているのは、旅程表と年表である。教科書のいくつかの写真についてこの旅程表と年表で跡づけることが求められている。指導書ではこう説明されている。「旅程表（街路，ルート，幹線道路）の上にならわかれは1つの景色を構成している要素をくつつける。われわれは1つのグラフ的な表現を提唱する。凡例は、完全に理解される前に受け入れられ、かつ利用される。CP の子どもたちはまだ縮尺の観念をもっていないことは明らかである。それが、2つの場合、すなわち空間及び時間において、他の場所との関係において1つの場所の相対的な位置を、他の瞬間と関係して1つの瞬間を、評価することを強えられる理由である。」

4. 準備級の具体的内容の検討

4-1 「夜明けから黄昏まで」(第1章) —準備級への導入—⁶⁴

この章は、*1〈イギリスの家庭における朝食〉、*2〈地下鉄のプラットフォームで〉、*3〈一人の農夫が畑に向かって出発する〉、*4〈一日の始まり：統合〉、*5〈企業の一つのレストランでの昼食〉、*6〈正午：統合〉、*7〈かつての工場の退時〉、*8〈キャンプの火〉、*9〈一日のおわり：統合〉、といった7枚の写真と7つのテキスト、3つの統合のテキストからなる。

*1の〈イギリスの家庭における朝食〉では英国の朝食はフランスの朝食よりも豊富で、昼食については反対であることを発見する。食堂の大きさ(空間)や窓の外の明るさ(時間)などの状況を確認し、さらに、この前後に家族がどんなことをするのかを考えさせる。カフェや林間学校での朝食のことを取り上げ、一日の食事を時間表にまとめることで、拡張をはか

る。

*2の〈地下鉄のプラットフォームで〉ではプラットフォームや照明の大きさなどに注目させ、それがエスカレーターで接近できる地下の空間に関係していることを発見させる。トンネルの下に伸びている鉄道を想像させたり(空間)、地下鉄においては永遠の夜が続いていることや、日の出の前にも日暮れの後も循環し、真夜中の数時間しか止まらないことを考えさせる(時間)。また、地下鉄を利用したことのある子どもに話しをさせたり、一日のうちに何回その両親などが家と職場を行き来するか考えさせたりすることで、拡張をはかる。

*3の〈一人の農夫が畑に向かって出発する〉では、人気のない自動車道とその下の1台の農業用トラクターから、早朝であることを発見させる。2方向への道路やそれを横断している道路に注目させたり、どんな旅をこのとき、正午に、そして夕方農夫はするか考えさせたり(空間)、写真上で日中の太陽の運動を示させ、簡単な絵にすることもさせる(時間)。また、農夫と同様外で働く人々のことを考えさせることで、拡張をはかる。

*〈一日のはじまり：統合〉では、農夫は(季節によって異なる夜明けの)変化にしたがっており、《夜明けに彼等の村を出発する》が、これにたいして、労働者と使用人はいつでも《6時の地下鉄》あるいは《7時の列車に乗る》というような観念が、起床する時間は仕事に行くための旅程によってさまざまであるといった補足的な観念が定着させられる。総じていえば、夜明けから夕方までの一日の長さや活動の継続との間の区別を明らかにすることに重点がおかれる。

*4の〈企業の一つのレストランでの昼食〉では、セルフサービスの店の働き、客は企業の使用人たちであることを発見させる。そのレストランは企業の中にあり、その企業は使用人たちの家から遠い町の中にあること(空間)、昼食の前後に使用人たちがすることを考えさせ、この場面が労働

日であること（時間）の状況を把握させる。他の昼食の在り方を考えさせて、拡大する。

*〈正午：統合〉では、太陽はもっとも高いところにあるという自然的な性格と、休息や食事など社会的な性格に注目させ、併せて、鐘の音、サイレンなどの情報にも関心を向けている。

*6 〈かつての工場の退時〉では、今世紀初頭のある工場が取り上げられ、《それは今日のようにではない》という子どもたちの確証を中心として、写真の中の女性たちの衣装と帽子に注目させ、さらに、道路には1本の電線があることを発見させる。車道、歩道、溝と建物との関係から道路の延長に注目させたり（空間）、地上で短い影からこれが正午の外出であることを考えさせている（時間）。そして、学校あるいは、近くの工場の開始時と退出時についての観察に、これを、拡大している。

*7 〈キャンプの火〉では、浜、岩礁、海、投錨している船、遠くの家などから、子どもたちに、人々は近くの村からやってきたのか、あるいはキャンプ場からやってきたのか考えさせ、発見させようとしている。水平線の向こうに海が広がっていることを想像させ（空間）、その人々がこの前後にすることを想像させている（時間）。そして、見せ物の夕べ、友人の家での夕べ、夏の散策など、非日常的な夕べに、拡大する。

*〈一日のおわり：統合〉では、自然としての昼間と、それを越えて《延長する》諸活動の区別がなされる。ここでも、昼間を表わしている時間表を作成させ、教科書の写真をその中に位置づけさせる。

以上が、教科書に即した教授学習活動であるが、補足的な研究としては
※1 日の出日の入りのカレンダーをもとにした1枚の絵へのそれらの時間の記入、※2 朝早く、正午には、午後には、夕方には、という言葉と自然的現象（光と闇、寒さ、暑さ、太陽の高さなど）、生物的現象（空腹、疲労、睡眠）、社会的現象（家の中での子どもたち、大人たちの行為；人々の

行為及び移動、道路の動き)とを結びつけさせる活動、※3動物界のリズム、人間による社会的リズム、さらには植物界のリズムの調査、※4子どもたちの昼間の習慣的行為を連続性を特徴づける言葉(それから、次に、そのあとで、など)で語らせて、通時的順序を理解させ、その途上でこれらの行為が展開されている場所や社会的集団を確かめること、※5子どもたちのうちの一人の一日の連続的な時間を示した日課表(7~20時)の作成、※6他の子どもの日課表の作成と※5のそれとの比較、※7色遊びによる、仕事、行程、余暇、休息を表わす、より詳しい日課表の作成、※8子どもがよく知っている人物の一日間の物語の作成、それと子どもたちの一日との比較をさせ、連続性と同時性、日常的なことと非日常的なことを区別させ、さらに、職業労働、家事労働、行程、余暇、休息にさかれている時間を明らかにすること、※9始まりとおわりのテーマでの、近隣の店、アトリエ、工場、事務所、作業場の調査、※10いくつかの一日の事例における移動の明確化(家→市場→家→店→家)、※11労働者のいくつかの一日を再度取り上げ、それが、外で(農夫、石工)、内で(売り子)、内と外と交替で(職人)、固定された行程で(郵便配達人、街路清掃人)、可動的な行程で(外交員、修理人)、限られた空間で(工場労働者)というように、どこで行なわれているかを考えること、などが提唱されている。

これらの教授学習活動を通して子どもたちに定着させられようとしている目標は、A活動としては、A1子どもたちに専門家たちの活動、家事に関する活動、休息、活動的な余暇の区別をさせること、A2時間は人々の仕事に従って同じようなやり方で展開していくのではないことを理解させる。B時間としては、B1子どもたちにとってはまだ漠然としている一日というものに一つの内容をあたえること、B2自然のリズムと社会的リズムを認識させること、B3日常性と事件的との区別をさせること、B4同時性を理解させること、B5子どもたちの表現に現われてくる時間の表現

を時間表の上に位置づけさせること、である。C空間としては、C1一日の中での仕事と余暇の交替に結び付けられた移動を通して子どもたちの環境を構成する直接的な空間の探究、C2活動の場所を位置づけること、C3諸地方へのアプローチは交通手段の利用によることを理解させることである。

4-2 「街路で」(第11章)⁶⁶⁾

この章は、*1〈ジャンゼリゼの行列〉、*2〈商店街〉、*3〈歩行者専用の街路〉、*4〈都心で：統合〉、*5〈新しい街路〉、*6〈効外で：統合〉、*7〈山で〉、*8〈平野で〉、*9〈中国の街路〉、*10〈ブラジルのバラック建ての貧民窟〉、*11〈ヴェニス運河〉、*12〈外国で：統合〉といった9枚の写真と9つのテキスト、3つの統合のテキストからなる。

*1の〈ジャンゼリゼの行列〉では子どもたちに都市であるいはテレビで軍事行列を見たことがあるかどうかを尋ね、その写真の中で、動いているもの、待っているものを区別させ、市民と軍隊を発見させる。その奥行きや幅、直線をなしている長い道路に気付かせ(空間)、それが行なわれた7月14日を1年の時間の帯に位置付けさせ、その大通りが非日常の様相を呈していること、そこは一時的に軍隊に取っておかれていること(時間)といった状況がおさえられる。そして、どんな状況の中で街路や広場はそれらの日常的な機能を迂回させられるか、また、その時に行なわれる変形は何かを述べさせることなどに拡張される。

*2の〈商店街〉では、*1との対比においてその歩行者と駐車している自動車に注目させて、その街路が商業センターであり、人々はそこへ必需品を仕入れるためや、店や事務所で働いたりするためにやってくることを発見させる。街路の大きさと道路の後退、隣接しているがしかし似てはいない建物、1階は店で2階以上はデパートは別にしてアパートによって占

められていること (空間)、この街路の建物は *4 のそれよりもずっと昔に建設されたものであること、あるものは再建されたものであること、それが春の日曜日ではないある朝に撮影されたこと (時間) を発見させる。都市のどこに商店街があり、そこはこの写真のように混雑しているか、それとも、駐車が規制されているか、そこにはどんな店があるのか、診察室か、それとも事務所かが尋ねられ、その利点と不都合な点とを考えると拡張される。

*3 の〈歩行者専用の街路〉では、自動車が全くなく、ゆったりした様子の散策者、歩行者のためのたくさんの場所や店、装飾の要素が全面にわたる建物を発見する。ここは都心であり、歩道のゾーンは制限されていること (空間)、建物は古く、あるものは、たぶん建て直されていること、歩道は変えられた街路であること、街路の異なる部分はそれ故異なる年代によるものであること (時間)、といった状況を捉えさせる。そして、都市の中で、あるいは、近隣の都市の中で歩道を位置付け、歩行者のために取っておかれた他の空間を位置付けさせ、新しい団地における公園をまた位置付けさせる。

*〈都心で：統合〉では、「店や事務所に向かっている人々」を始めとして、テキストに出てくる語句を正確に述べるのが求められる。

*4 の〈新しい街路〉では、車道の上で遊んでいる子どもたちの姿から交通が頻繁でないこと、建物は道路から引き込んでおり、高いというよりは長い建物で、もっぱら住宅用の建物であること、また、ここでは駐車場は決められていることを発見させる。その街路は袋小路であり、それは田舎に行き着くこと、広場が都市の周辺に見いだされること (空間)、建物は最近同じ時期に建てられたこと、近代的な線と近代的な材料の存在 (時間) をおさえる。そして、子どもたちは、完全に終わっていない整備や個人的な空間 (小庭) あるいは集団的な空間 (公園) についてなど新しい分譲地

についての彼らの観察を集めさせて彼らの認識を拡大する。

* 〈効外で：統合〉では、写真4を、団地及び住居に分類させ、街路の、田舎の中に進んでいる都市化の、途上にある建設の、団地の、近代的な建物のそれぞれの例がこの教科書の他の章の写真の中で探される。

*5の〈山で〉では、規則正しく配置されていない家々と一本の街路との間の狭い通路に着目させ、ここでは、街路は村の少数の住民によってしか使われていないこと、その街路は駐車場所ではないこと、そして、影と太陽から、はみでたひさし及びバルコニーは南向きであること、などが発見される。その家々は土地の傾斜にしたがっていること、その写真家は村を見下ろしているが、それは坂の上にいるのであって彼が飛行機の中にいるからではないこと、庭は村の近くに集められており、遠くには森があり、村から村への、村から畑への小道があること（空間）、季節は冬であり、家々は古いが、ある屋根材は最近のものであること、家は住宅のために前以て線引きされた全体計画なしに、かつて、少しずつ建てられたこと（時間）が状況としておさえられる。子どもたちが村にすんでいる場合には家々の配置や街路の大きさを比較させ、そうでなければ、子どもたちがヴァカンスに見たことを話させ、ここでの学習を拡大させる。

*6の〈平野で〉では、ブルターニュの農家は1階建てで、無窓の漆くい壁を伴って、長々と建てられており、藁や小石を材料としていること、家は1つ1つ離れており、後退は不規則であること、居住用室と農業用室は混ざっていることを発見する。街路は畑へと導いていく小道によってあるいはルートによって延長されること、その街路は、都市におけるように車道と歩道を区別したり、アスファルト舗装されたりしてはいないこと、狭くて駐車できないこと（空間）、石の概観をした家は古く、そのうちの1軒は廃虚であること、より最近の家あるいは変形された古い家は漆くいでも覆われていること、そして、50年あるいは100年前においても街路はそ

んなに変わっていなかったであろうこと (時間) といった状況を把握させる。この例によりながら、村の、あるいは子どもたちが知っている村の街路の大きさ、その舗装、街路との関係による家の位置、さらには家の前の道路の (倉庫としての) 利用に、拡張していく。

*7の〈中国の街路〉では、初見では決してエキゾチックではないが、よく見ると自動車がほとんどなくて自転車に乗っている人々によって道路が占拠されていること、自動車は専らトラックと乗合自動車であることが、発見される。その写真は、交差点の近くで撮られたこと、中国はアジアにあり、1つの大変大きな国であること (空間)、同じ時代においても1つの国と他の国とでは類似と差異があること、フランスで自動車よりも自転車を見かけたのは、60年前、70年前のことであること (時間) といった状況がおさえられる。

*8の〈ブラジルのバラック建ての貧民街〉では、街路の真ん中にそのリンネル類を広げている婦人、同じように地面に置かれたパイプと水の導管、間に合わせの材料、鉄板、板、大梁でやっと再建された家、この街路が1本の本当の街路であるために不足しているものに注目させ、その街路が歩行者の役にしか立たないことが発見される。ここでは、都市の外れに定住した人々が、彼ら自身で、彼らが見つけた材料で、避難所を作ったこと (空間)、古い廃棄された家々が新しくやってきた人々によって占拠されたこと、整然たる建設と自発的な建設とは区別されること (時間) がおさえられる。そして、村あるいは都市の街路について、それらの街路が、前もって計画されたものであるのか、あるいは、それらの街路は少しずつ形成されたものであるのか識別すること、もしもそれが存在しているならば、建築線を探すこと、テント、キャラバン、避難所など仮の家を列挙することに拡大される。

*9の〈ヴェニス運河〉でもまた、異常さが強調され、この都市、ヴェ

ニスでは街路の大部分は運河であること、人はもっともしばしば水上を船で移動することが発見される。ヴェニスは潟の上に建設されていること、そこはイタリアの1都市であること（空間）、この都市は大変昔に建設されたこと、ゴンドラはかつては長い竿でもって移動したが、今日ではモーター船が乗合自動車のように旅客を運んでいる（時間）また、環境が許せば河川や運河についての観察をさせ、河岸は商品を入庫するのに役だっているかを考えさせている。

*の〈外国で：統合〉では、教科書の中の文書を「自転車で溢れた街路」、「船のための道」、「土の街路」、「自由に雄牛が通る道」、「そのための道」、などに対応するようにさせる。

以上が、教科書に即した教授学習活動であるが、補足的な研究としては※1 買い物に行く、彼らの仕事に行く、散歩をしているなどの目的別による街路の人々の認識をすること、※2 配置し維持しかつ修理をする、売る、輸送する、安全の保証するなどの目的別による、街路で働いている人々の行列、※3 その活動が街路上で始まり、時にはそこを侵害している人々の列挙、※4 いう「街路はたくさんの人々がいるか」あるいは「街路にはほとんど人がいない」と言えるか、1日の中で、週の中でそれぞれ答えさせ、併せてその理由も考えさせること、※5 街路における歩行者について、どこを彼らはまわっており、どこで立ち止まっているか、何の目的で彼らは移動しているのか、経済性や身体的練習などの理由は何かを考えること、※6 自転車や軽オートバイの交通の利点について考えること、※7 どんな理由のために自動車は交通手段として他のものよりも好まれているのかについて考えること、※8 単純化した都市の平面図の上で公共交通の線を認識させ、併せて、なぜ利用者たちは交通手段を共通にしているかの理由を探ること、※9 歩行者の善い行ないのコードを入念に作ること、※10 街区に役だっている1本のバス路線を、可能であれば実際に、あるいは、

家族の移動を思い起こさせて追いかけて絵あるいは大きな紙の上に、出発地点、到着地点、停車地点、駅や郵便局や港などの目立った連絡の地点を記入した、時刻表を書くこと、※11子どもたちに利用したことのある都市の乗合自動車について都市の簡略化した平面図の上でその道程表を追って行かせること、そして、その線が意味していること及び公共の交通が意味していることを理解させること、※12子どもたちが彼らの住居から学校へやってくるために迎ってくる道を数え上げさせ、その道程表のどれかをいくつか絵の上に跡付けさせること、※13人が行くあるいは村の訪問のために迎るであろう1つの道程表を前もって迎ること、※14絵あるいは1枚の大きな紙の上に近隣の1本の道を表現し、それによって、車道、歩道、木々の植生、優先通行の通路、交差点、乗合自動車に取っておかれた空間、2車線、禁止あるいは義務の意味、駐車場を認識させること、※15地下あるいは空中の通路を、また、覆われた通路を列挙すること、※16学校に隣接する街路のどれか1本を連続的に表現させ、そこに、商人と職人を位置付けること、それぞれの子どもに1つの平面図を与えて、可能であれば、集団的にあるいは個人的に証明させること、そして、「の間に」、「の横に」、「の近くに」、「を越えて」、「ずっと遠くに」、「偶数番地側に」、等々の用語を使わせる機会をもつこと、※17明らかな縮尺は除外して、先の道程表を統合して、学校から出発する近くの街路の1つの平面図を確立すること、※18もしも可能であれば、街路のそれぞれの位置に注意させ街区を端から端まで行かせ、帰路で絵をかかせ、その位置を口頭で確かめること、※19拡大しかつ単純化した都市あるいは街区の平面図の上でタクシーの運転手遊びをすること、※20どれだけの時間が学校からある場所に行くのにかかるかで、距離を評価すること、※21都市の街区との関係で村の街区を描写させること、※22どのように街路は都市あるいは村から出てルートにおいて変化して行くかを指摘させること、※23平坦な街路、上っている街

路 (あるいは下っている街路), 階段を挙げること, そこから, 都市の空間における平坦な部分と起伏の多い部分との分割をそこから導き出すこと, ※24 もしもその村が高い地点あるいは見晴らしのきく場所を提供させてくれるならば, そこへ行くかあるいはその場所への家族での散歩を促し, そこへ登りながら何を発見することが出来るかを見付けさせること, ※25 近隣の建物において, 朝, 昼, 晩に日の当たる部分と当たらぬ部分とを認識させること, ※26 子どもたちとともに, 店, 建物, 公共の建物, 街路自体について, どのように知っているかを探究すること, ※27 街路におけるポスターについて描写させ, 認識させること, ※28 街路の名前, 建物の記入, 交通のための命令, 店の上の広告文, さらにそれぞれのショーウィンドウに書かれている言葉, といった街路の言葉の追及をすること, ※29 植え付け, 公共の照明, 店のショーウィンドウ, 公共の建物及び個人の建物の正面, ※30 どんな時に街路は例外的な様相を呈するのか, などが提唱されている。

これらの教授学習活動を通して子どもたちに定着させられようとしている目標は, A 活動としては, A 1 街路の中で, 交通, 建設, 修理, 維持に結びついた特別な活動の枠を, そして, ある商業が行なわれている所を認識すること, A 2 街路の中で, 仕事, 店, フランス電力公社などに行くための通行場所を認識すること, A 3 街路の中で, 散歩の場所, 出会いの場所, 別れの場所を認識すること, A 4 先の諸活動の分類に従って, 都市中心部の商業的街路, 住宅街区の街路, 工業地区の街路など, 1つの街路の類型を準備すること, が目標とされる。B 時間においては, B 1 街路のリズムを証明し, 視覚によって, しかし同じく, 音と臭いによって異なるひとときを性格づけること, B 2 両親の助けを得て, 古い写真あるいは古い絵葉書を用いて, だんだんと通行の場所となり, だんだんと出会いの場所ではなくなってきた, 世紀の始め以来の街路の進化の観念を準備するこ

と、が目標とされる。Cの空間においては、C1街路によって占有された空間の表現を固定すること、C2それに接している建物との関係により、道路によって占められた空間を観察し、後退の存在あるいはその欠如を認識すること、C31枚の平面図を入念に作成する見通しのもとで、近所の街路の相対的位置を固定すること、それらの大きさに従って街路の類型化をさせること、C4特に、都市の周辺部と中心部との結合や大きなサーヴィスとの連絡を伴って、都市に1つの骨組みを与えるために、都市の交通の線を用いること、C5都市の居住の多少なりとも大きな稠密さを認識すること、C6それを取り巻いている自然の景観との関係によって、街路の、完全に建設され、人工的な性格を認識させること、C7オリジナルな自然の景観を認識すること、C8街路の公的性格を意識させること、が目標とされるのである。

5. 準備級の社会認識教育が示唆するもの

以上、準備級の『いつか…どこかで』について、その構成原理と単元構成例を見てきたが、そこから次のことが言えるであろう。

(1) 小学校低学年において、子どもたちに社会認識の基礎となる、社会的な諸活動、時間及び空間の認識を、明示した上で、それらを身に付けさせることが大切である。

(2) その場合、その段階の子どもたちの心理(学)的な指標に応じた可能な活動によって、初めてその定着は可能になる。

(3) 小学校低学年では、子どもたちに与えられる情報の中心は、映像的なもの(写真)が相応しい。同時に、これを出発として、一方においては、その映像に捉えきれなかった状況へと拡大をはかり、他方においては、その映像的なものと関係したテキストを媒介とした言葉(概念)へ、さらに、

テキストにない言葉 (概念) へと、語彙の拡大をはかっていくことが大切である。

(4) 時間的な認識については、一日、一週、一年、人の一生といった時間表 (年表) の導入がなされ、それによって、認識を視覚的に表現させることによって、子どもたちの認識を確実にすることが可能である。

(5) 小学校低学年から、かつて (過去) のことや、他の国々 (外国) のことを導入し、それとここ及び今との比較によって、共通点と差異に気付かせるなどして、その時間的、空間的拡大をはかることが可能である。もっとも、正確な時間的、空間的位置付けはこの次の段階とされているが、例えば、大まかな世界地図の略図上で、登場してくる国々を位置付けることなどは、大事な活動である。

(6) 子どもたちの日常的な生活経験を、絶えず、社会的な活動、時間、そして空間との関係で、位置付け直すことが必要である。

(7) 社会的な活動、時間、空間のいずれについても、それぞれの概念を獲得させ、定着させるためには、入念な活動がたくさん準備されているよう配慮されなければならない。

(8) 語彙は出来るだけ言い換えをするのではなく、状況を理解させた上で、その状況と結び付いて使用させることで、定着をはかっていくことが大切である。

(9) 低学年においてこのような社会認識の定着があって、始めて、中・高学年での社会認識の拡大が可能になる。

こうしてみると、我が国において、低学年社会科が廃止され生活科となるに当たって、その名称はともあれ、社会認識の育成を行なおうとすれば、上記のような点をもう一度点検する必要があるであろう。

注

- (1) Raymond Ciais, *Un jour ... quelque part* (éveil à l'histoire et à la géographie), Bordas, Paris, 1984.
- (2) Reimond Ciais avec la collaboration de Jean-Louis Rigard, *Un jour ... quelque part, exploitations pédagogique* (éveil à l'histoire et à la géographie), Bordas, Paris, 1985.
- (3) 金子邦秀, 環境への目ざめから歴史・地理教育へーフランスの社会科からー, 社会認識教育学会『社会科の21世紀ーこれからどうなる・どうするかー』明治図書, 1985.
- (4) 金子邦秀, 各国の社会科教育改革 2 フランス (一九七五年のアビ改革後の社会科教育課程), 「歴史地理教育」No. 398, 歴史教育者協議会, 1985.
- (5) 金子邦秀, 21世紀へのヴィジョンと社会科改革のポイントーフランスの社会科から学ぶものー, 「教育科学社会科教育」No. 281, 明治図書, 1986.
- (6) 金子邦秀, フランス社会科から拾う面白い問題史, 「教育科学社会科教育」, No. 304, 明治図書, 1987.
- (7) 金子邦秀, 歴史学習“遡源法”という手もあるが, 「教育科学社会科教育」No. 336, 明治図書, 1990.
- (8) アビ改革のことについては, ルネ・アビ(村田晃治訳)『若きフランス人のための戦いーアビ教育改革回想録ー』東信堂, 1989.
- (9) 「新しい地理学」は, (1)人間の活動の空間的痕跡を研究し, 風景のモデル, 1つの地方の経済的, 社会的, 政治的な活動の結果との関係を明らかにする「社会地理学」, (2)小学校と大学の研究がより強力な絆を保つことが出来るものとしての「環境」, 「風景」(3)生きるために, その環境を征服するために「地理を行なうこと」, などの特色をもっている。(Francine Best, François Cullier, Anne Leroix, *Pratiques d'éveil en histoire et géographie à l'école élémentaire*, Armond Colin-Boulier, Paris, 1983, p. 28.)
- (10) 「新しい歴史学」は, (1)人間的なものであって彼に無関係なものは何もないと言う立場に立つことによる 探究の領域のおびただしい拡大 (社会史, 量的歴史, 心性史), (2)すべてのことが同じ速さで進歩していくのではないことを認め, 年あるいは時によってさえリズムを付けられる短い時間から, 同時代人にとってはより認知出来にくい数十年単位ではかられ, とりわけ人口統計学あるいは経済学に適用される重なりあった時間, 数世紀その上では数千年で表現されかつ相対的な慣性において時間の流れを止めているように見えるー心性あるいは農業技術の条件の例ーといった長期的な時間, 構造のそれに至る, 歴史の多様なリズム, (3)種々の文書に加えて, 炭素14, 航空写真, コンピューターの

使用,あるいは地理学,言語学,社会学,民族学,精神分析学,経済学との出会いから引き出されてきた学際的な新しい方法,などをその特徴とする。

(Best, *ibid.*, pp. 27-28.)

- (11) 「新しい心理学」は,ブルーナーから子どもの精神の形成における連続性と言うことや,〈スパイラルな〉概念教授などを受け入れ,ピアジェから子どもの辿る認識発達の筋道として,自己中心性を脱し,具体的思考から形式的思考への移行といった考え方を受け入れて成立した。(I. N. R. P., *Histoire et géographie à l'école élémentaire pour une mutation* [Recontres pédagogie] 1986 N° 13, pp. 27-29.)
- (12) Best, *ibid.*, pp. 78-79.
- (13) I. N. R. P., *ibid.*, p. 55.
- (14) Ciais, *ibid.*, pp. 4-7, et Ciais avec Rigard, pp. 7-12.
- (15) Ciais, *ibid.*, pp. 44-49, et Ciais avec Rigard, pp. 69-77.